
CONTROLS

unsung

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CONTROLS

【Nコード】

N4434X

【作者名】

unsung

【あらすじ】

2012年、日本では次々と不自然な出来事が起こりはじめていた。100人以上が一斉に自殺、彗星の如く現れたカルト的な人気を誇る音楽バンド、機械のように統制の取れた行動をする人々。やがてそれらは日本だけに留まらず世界に波及していく。不気味に変わり行く世界の中で、少年が辿り着いたのは――

CAUSE（予兆）

まだ暑さの残る9月。朝の混雑した電車で揺られつつ少年“白取悠一”は学校に向かっていた。当然座る席など無く、入り口付近の壁に寄りかかって扉の窓から外を眺めていた。

彼は、現在17歳のごく普通の標準的な高校2年生である。勉強ができないかといえばそうではなく、運動ができないかといえばそうでもない。性格が悪いかといえばそうでもなく、友達がいないかというところでもない。極めて平凡な少年であった。逆に言えば、平凡なあまりそれほど目立たないのだ。ただ一つ、彼が平凡ではない点がある。それは、考え事をやたらに好むことである。

「電車って…なんで動いてんだろうな。やっぱり電気が…でも電気をどうやってエネルギーに変えているんだ…？」

このように場所を選ばず小声で独り言を嗜むのも、彼の平凡ではない点の一つである。

そうこうしているうちに、彼は目的の駅に到着した。彼を含めて何人かがその駅で下車した。

白取は改札を出ても相変わらず考え事に耽っており、独り言をぶつくさ言いながら歩いていく。ここから学校までは徒歩5分くらいで時間にも余裕があった。そのためか、彼はふいに近くのコンビニへと入った。音と共にいらっしやいませという店員の声が聞こえる。コンビニには既に先客がいた。客の大半は雑誌のコーナーに並び、雑誌を読んでいた。白取は、客たちが何の雑誌を読んでいるのかとこっそり覗いてみる。

「なんでみんな同じ雑誌読んでるんだろ」

不自然にも思える光景だった。まだ若い大学生と思われる女性も、40代の背広姿の中年男性も、白取と同じ年代の高校生と見られる少年もこぞって同じ雑誌を読んでいた。好奇心に唆され、白取も彼らが読んでいるそれと同じ雑誌に手を伸ばした。――表紙から判断するに、物理学の雑誌である。白取は少しだけ興味を持ち、ページをめくった。

「東京大学大学院理学系研究科チーム…ニュートリノねえ…」

しばらくして白取は雑誌を閉じ、元の場所に戻して店を出た。出る途中、彼は窓に風変わりなポスターが貼ってあるのを見つけた。有名な物理学者であるアインシュタインの顔写真をモチーフにしたポスターだ。どうやら何らかの商品の宣伝らしい。ふと彼はこのポスターから、以前どこかで見たことあるような既視感を抱いた。

「こいつ、二日前に電車に吊るしてあったポスターだ。最近物理学が流行ってるのか？」

学校に到着する。教室には既に何人かクラスメイトがいた。適当にあいさつを交わし、白取はさつさと朝の支度を終わると友人の席へと向かった。

「よっす」

「ああ、おはようー。どうした？そんな不思議そうな顔して」

この友人は遊馬智といい、長身で天然パーマに黒縁の眼鏡が印象的な白取の親友である。あまり深い人間関係を持たない白取だが遊馬

に対しては例外的で、かなり親しい関係を築いている。お互い、ほとんど何でも気兼ねなく話することができるほどである。

「――さっきコンビニ寄ったわけよ、あの通りの。分かるだろ？」

「あー、分かるぜ」

「まあ、雑誌とか読んでる人がいるわけよ」

「うん」

「で、みんな同じ雑誌読んでるんだよ。すげーだろ？何の雑誌だと思っ？」

「早く言えよ」

「物理学だぞ。40代のオッサンも女子大生のねーちゃんもみんな物理学の雑誌読んでるんだよ。何かおかしいと思わないか？」

「偶然だろそりゃ」

遊馬が呆れて笑う。

「考えすぎぜユウ。日ごろから無駄なことに頭使いすぎて疲れてるんじゃないのか？」

「余計なお世話だ。まあいい」

ユウというのは白取の仇名だ。白取と親しい遊馬だけが彼をこの名で呼ぶ。そうこうしているうちに自分の席に戻ろうとする白取。そこを、遊馬が引きとめた。

「ユウも部活入ったらどう？今からでもうちは歓迎だぜ」

「悪いな智、剣道は中学のときだけで十分なんだ。それに塾の勉強も忙しいし」

遊馬は中学から引き続き、この高校でも剣道部に所属しており、その道ではなかなかの結果を出している優秀なスポーツマンだった。

だが、白取はもう剣道はこりごりだった。夏は蒸し暑く、体中から滝のように汗が流れ落ち、冬は冷たい床を素足で動き回るせいで指先の感覚が無くなる。何よりも面をつけているのが息苦しくてたまらなかったのだ。

それから更に時間が経ち、クラスの半分くらいの生徒が登校してきた。白取は今日提出予定の宿題を片付けながら色々な生徒たちの会話を聞いていた。プリントに向かってひたすらペンを動かしているとしても他人の会話が自然と耳に入ってくるのだ。特に耳に入るのは、朝いつも黒板の前で談話している女子の4人組のグループだ。

「ねー、曲聴いた？ほんとに神でしょあれ！」

「えー、そうかな……」

「何で分からないの？あれは絶対流行るって！」

「そうそう、ウチもそう思う」

「あたしあんまり好きじゃない」

「英梨はノリ悪すぎだよー」

「そうだよー。ねえ、他にもあのバンドの曲無いの？」

さすがに白取は彼女らの顔を覚えてしまい、見慣れていた。そうして色んな人たちの会話を聞いているうちに、宿題が終わった。丁度チャイムが鳴り、担任の教師が教室に入ってきた。

「はい、じゃあ朝のHR始めるぞー」

学級委員が起立の合図をし、朝のあいさつをする。いつも通りの光景だ。ただ、一つだけ空席があることがいつも通りではない。どうやら教師はこのことを知っているようだった。

「今日は伊村有希^{いむら ゆき}が体調不良で欠席と聞いている。最近気温の差が日によって激しいからお前たちも気をつけるように。以上」

その日の昼休み、白取は学校の屋上にいた。成長する入道雲を遠くに見据えながら、彼は座っていた。これもいつも通りである。彼は昼休みは大抵屋上におり、そこで色々なことを考えるのだ。変わっているといわれればそれまでだが、彼にとってはこの時間はむしろ安らぎに近いものだった。

一週間ほどして、自立たない伊村の存在は当然そこには無かったもののようにクラスメイトたちから一方的に忘却され始めていた。そんなある日の4時間目の体育の授業。

陸上のハードル走の競技だった。ちょうど遊馬の番である。白取は彼のすぐ後に走る予定で、友人の走りがいかなるものかを見物しようとしていた。

「よーい、はい！」

合図と同時にクラウチングスタートで走り出す遊馬。元々長身なため歩幅が広く、剣道部での鍛えの成果もあってフォームも整っていた。順調にハードルを飛び越し、無事に終える。

タイムが教師から発表されたとき男子の間から小さなどよめきが上がった。暫定トップのタイムである。

「——次白取じゃないのか？準備しろよっ！」

後ろの生徒に促され、スタートの準備をする白取。合図と共に地面を蹴って走り出す。一個目のハードルが迫ってくる。遠目で見ると

それほどではないが、近づくと共に少しずつそれが予想よりも高いものだということに気づく。踏み切り、無事に1つ目を通過。2つ目3つ目も無事に通過したが、最後の1個でタイミングを誤り、倒してしまった。足が地面に着く。と、同時に足首の辺りに激痛が襲った。しばらくその場にしゃがみこむ白取。どうやら着地のバランスを崩してひねったように見える。すぐには歩くことができなかったため、教師に勧められて保健室に向かった。入り口で運動靴を脱ぎ、中に入ると静寂の空間があった。その場にいた教師に手当てをしてもらい、少し安静にしているとカーテンの向こう側にあるベッドに人影が見えた。

「誰か寝てるのか…誰だろあれ…」

「ああー、白取くん。ちよっと職員室行ってくるねー、動かないでそのまま安静にしてて」

「——あ、はい。分かりました」

教師に安静を命じられつつも、好奇心に駆られて少しだけベッドのカーテンの隙間を覗いてみる。偶然、そこから少女の横顔が見えた。黒くて長いストレートの髪。どこか儚げな顔立ち。静かで、それでも憂いを帯びた雰囲気醸し出す一人の制服姿の少女がそこに横になっていた。携帯電話をいじっていて、覗かれていることには気づいていない様子である。——白取はささやかな驚きを感じた。そこにいたのは紛れも無く不登校になっていた伊村有希だったからだ。勇気を振り絞って声をかけてみる。

「あの…伊村さん？」

小さな声でそう言って突然カーテンをめくった白取に伊村は驚き、携帯電話を隠した。こうしてじっくりと見てみると、彼女はなかなか整った顔立ちをしていた。いつも長い髪で隠れていてよく見えな

いからなのだろうか。それとも保健室という閉鎖的な空間で二人きりでいるという妙な背徳感からだろうか。

「……何…？」

「——あー。…俺、体育で足怪我しちゃってさ。この通り。いやー、偶然伊村さんがいたからどうしたのかなって思ってた…」

「……保健室登校」

「…そうだったのか——クラスメイトとして、なんか心配だったんだよ。急に学校来なくなっちゃったから」

「私を心配してくれる人なんていない。ひやかし？」

白取は面倒な女子だと心底思った。ネガティブな思考回路をした相手に対しては、どんな言葉もネガティブイメージに変換されてしまっただろう。王子様のキスでもあればこの眠れる森の美女は起きるのだろうか、生憎白取は伊村にとっては王子様では無いようだ。それは彼女の無愛想で無関心そうな態度と平坦で否定的な口ぶりから読み取れる。

「俺でもよかつたら聞かせてもらえないか。なんで学校が嫌になったのか。誰にも言わない、約束する」

できるだけ真摯な眼差しを心がけて、相手の目をみながら白取は言う。目を見るのはコミュニケーションの基本だが、どうやらこの少女は白取の顔すら見ようとしない。以前としてベッドで横たわったまま明後日の方向を向いている。

「何であなたに話さないといけないの」

冷たい態度を貫く彼女に、白取は仕方なく説得を諦めた。

次の日の放課後、白取は再び保健室に向かった。そこにはやはり伊村有希がいた。彼女は相変わらず携帯電話をいじっていた。好都合なことに、教師がいなかったので白取はまた彼女に話しかけた。

「——来ないでよ」

「じゃあ、伊村さんが教室に出てくるようになったら来ないよ」

「じゃあ、ずっと家にいる」

「何でそうなる…」

ベットに寝そべったまま、後ろを向いて喋る伊村。明らかに間違ったコミュニケーションである。

「あなたには居場所があるのね——」

「…居場所」

その言葉に白取は心を打ち抜かれたような衝撃を受けた。なぜなら今まで彼はそんなことを考えたこともなかったからだ。

「伊村さんはここにいないじゃないか。それが居場所じゃないの？」
「…」

黙り込む彼女。しばらくして、小さな嗚咽が聞こえた。彼女が泣いていると悟った白取は、じっと黙って椅子に座っていた。

「俺は、伊村さんの味方ですよ」

そう言って、白取は部屋を去った。

その日の夕方、部屋でテレビを見ていた白取は、奇妙なCMが繰

り返し放送されていることに気づいた。

青いリングと赤いリングが床に置かれており、青いリングはやがてたくさんの赤いリングに囲まれた。どうやらこのCMはストップモーションアニメを採用しているらしく、青いリングは自分で階段を上り、屋上へと辿り着いた。そして、リングは屋上から転がり落ち、地面で碎け散った。そして彩度を無くした空の映像が映り、中央に小さな文字で『あなたの居場所、ありますか？』というメッセージが表示された。

このCMは、多数の個人や企業から構成される公益法人が制作しているものだった。この団体は以前からもメッセージ性の強いCMを制作していたが、今回は異様に不気味であり後味の悪いCMだった。果たしてこれが何を伝えようとしているのか、白取にはどうも理解できなかった。

それから白取は毎日のように放課後に保健室に行った。幸いなことに放課後はしばらく教師が保健室にいないことが多く、気兼ねなく伊村と会話ができた。彼女はまだまだ心を開いていないようで、口先では白取の事をうるさがっているように見える。だが、彼女は白取を追い出そうとはしなかった。

「ねえ、あなたは私のこと嫌じゃないの？」

ある日、彼女がそう問いかけた。

「嫌じゃない」

「――信じられない」

「信用されなくなっただけだよ」

伊村は相変わらずぶっきらぼうで無表情で、寂しげだった。

「どうせ私のこと言いふらすんでしょ」

「そんなことしたって俺には何のメリットもないよ」

「あなたのような他人が考えてることって、ほんと訳分らない。まるで別の生き物」

ふと、白取は彼女の鞆に付けられている十字架のアクセサリーに目をやった。そして思いついたように話を始める。

「——旧約聖書の話だ。初めて誕生した人類は女性で、イヴっていう名前だったらしい。それからアダムっていう男性が誕生して、その二人が人類の起源なんだ。

俺たちはみんな、その二人の遺伝子を受け継いでる。だから別の生き物なんかじゃない。分かり合えるはずなんだ」

「そのくらい聞いたことあるわ」

冷たく返す伊村。

一週間後、白取はテレビで嫌なニュースを聞いた。3日前、中学2年生の男子生徒が校舎から、更に2日前42歳の男性会社員が勤務先のビルの屋上から共に飛び降り自殺。

どちらも目立たない暗い人間だったという。特に中学生のほうは最近まで保健室登校を続けていたらしい。ふと、伊村有希のことが脳裏を過ぎった。何か良くないことが起ころうとしている。白取は直感した。

彼は即座に、家族共用のパソコンを使ってインターネットに繋いだ。自殺のニュースを調べていると、テレビでは触れられていないような衝撃的な情報が見つかった。

——ここ数日間だけで100人あまりの人々が自殺したという情報だった。その方法は全員が飛び降り自殺。ニュースの中学生と男性

会社員もそのうちの一人である。大勢の人間が同じ方法で自殺を図る。とても不自然な出来事だった。

そしてその日はやってきた。いつも通りの時間に学校に着き、遊馬と話をしていると不意に廊下が騒がしくなった。まだクラスの半分くらいの生徒しか登校していない時間帯である。

「おい！誰か屋上に立ってるぞ！」

「なんだあいつ？何やる気だ？」

不意に聞こえた男子生徒の声。白取の胸の鼓動が高鳴った。何かが起きようとしている。

「遊馬、俺ちよつと見てくる」

「あ、おい！——白取、どこ行く気だ！」

顔色を変えて教室を飛び出していく白取を遊馬が引きとめようとするがもはや無駄だった。彼は屋上に向けて走った。途中、窓から上の様子を確認した。人の姿が見える。人影はじつとしていて動かない。息を切らしながら階段をのぼり、扉を開ける。

——そこに伊村有希はいた。

確かに屋上に彼女はいた。屋上の安全フェンスの外側で、白取のほうを向いて立っていた。彼女の長い髪が風に揺れる。

「伊村さん！戻って来い！」

白取が思い切り叫んだ瞬間、伊村の身体が傾いた。そして彼女は小さくつぶやいた。

「『あなたの居場所、ありますか』——」

伊村の体が後ろに倒れていく。まるで地球の重力が1/2になったかのように異様なほどゆっくりと。彼女の儚げな双眸はずっと白取のほうを見つめていた。

「——やめろ——」

倒れていく伊村を受け止めるものはもう何もなかった。ただ万有引力という名の非情な絶対法則によって少女の身体は屋上から落下をはじめ。

その場に立ちすくむ白取の耳に、やがて大きな鈍い音が消こえた。

——彼女の死を告げる音である。

伊村有希はすぐに病院に搬送された。応急処置も行われたが頭部の損傷が激しく、間もなく死亡が確認された。

数日後、行われた葬儀に白取は参列した。彼は伊村の両親から彼女について、昔から引つ込み事案で自分を表現することが苦手だったため知り合いが少なく、親しかったのは白取くらいだったということを知られた。彼女はコミュニケーションをうまくとれず、白取の前では無愛想でいることそ多かったものの、自身の母親には「白取という仲のいい友達ができた」と嬉しそうに語っていたらしい。白取は救えたかもしれない彼女を救えなかったことに対し強い自責の念を抱いた。

葬儀が終わったあと彼女の両親と再び会話をし、その際に彼女の遺書と思われるもののコピーを受け取った。両親によれば、彼女は心を閉ざしがちでよく分からない部分が多く、この遺書に書いてあることの大まかな概要はつかめたが、謎めいた文章が書かれているため両親であってもよく分からないらしい。そこで、親しい人間だった白取ならば彼女の自殺の要因が見えてくるのではないかと思いいこの遺書のコピーを託したのだった。

白取は帰り道で涙を堪えて拳を握り締めた。

「――俺が…助けてあげられなかった……」

家に到着し、自分の部屋でその遺書のコピーを机の上に開いた。一見して整った字は、伊村が達筆だったことをよく示している。

遺書の前半部分は両親への謝罪の気持ちだった。だが、途中からキーワードが出てきた。

『私はリンゴ。出来損ないの悪いリンゴ』

白取はすぐにあの不気味なCMを思い出した。リンゴ、飛び降り自殺。そして彼女が飛び降りる前に言った一言『あなたの居場所、ありますか』。彼はそうしてある結論に達した。

——伊村有希の自殺は、恐らくリンゴのCMによって引き起こされた。姫は毒リンゴによって殺されたのだ。

更に調べていくと、リンゴのCMはここ一週間以内に放送が開始されたものということが明らかになり、同時多発的な飛び降り自殺の発生時期と完全に符号する。

その後、白取以外の人物もこの結論に辿り着いたのか、公益法人に対してクレームが相次いだ。結果、CMが公の場で放映されることは二度と無くなった。

——今、白取のクラスには空いた机が一つある。その机には、一つの花瓶が置かれている。伊村有希という人物がかつてそこに存在していたということを示すかのよう。

I D O L (偶像)

「さあさあ皆様お待たせしました！今日のメイン！」

ステージの司会者が声を張り上げる。熱狂する観客たち。

「S・I・N・(サイン)の登場です！」

白い煙が噴出し、様々な色のライトが照らすなか、3人の青年が出てきた。一人は伶俐な顔つきで颯爽と歩き、もう一人は優しそうな笑顔を振りまき、後の一人は手を振って歓声に応えていた。3人とも黒いリストバンドを右手首に付けており、そこにはなにやらマークと思しきものが描かれていた。恐らくこのバンドのマークだろう。

「ヴォーカルの『セル』、ギターの『オルタ』、ピアノの『スミス』の3人による、メンバー全員が東大出身の超エリートバンドS・I・N。！2007年にファーストシングル『矩形波』でデビューし、その独特でメロディアスな曲調が若年層で大きな話題を呼び、今や日本の音楽シーンを引っ張るリーダー的存在！そんな彼らが本日ここで新曲を披露してくれます！さあ行ってみよう！S・I・N.で曲名は『オービット』！」

セル、オルタ、スミスというのはバンドの活動上での偽名だろう。その証に、彼らはみな日本人の顔つきをしている。オルタがギターを掻き鳴らし、ヴォーカルのセルが静かにマイクを構える。まもなくスミスによるピアノの伴奏が入り、曲がはじまった。会場は水を打ったように静まり返り、S・I・N.の演奏する音だけが響くことから、観客らの興味の対象がS・I・N.の新曲に集約されていることは明白である。

そのライブ中継の様子を、白取はテレビを通して、家族との食卓で静かに見ていた。

「親父、そんなに人気なの？このS・I・N、っていうバンド」

白取が父親に問いかける。

「ああ、流行ってるそうだ。うちの仕事場の若いヤツもこれにハマってるらしい。俺にCDを薦めてきたよ」

「母さんは？」

「…最近の音楽はよく分からないのが多いけど、この曲はなかなかいいと思うわ。すんなり入ってくる感じ。悠一は音楽聴かないのかい？」

「俺は最近の音楽はあんまり…洋楽とかはよく聴くけどさ」

S・I・Nの流行は若年層を中心にして瞬く間に広がっていった。一方、20代、30代の社会人の間では物理学に関する興味が高くなっていることが判明した。それまで物理というのは流行の材料にはならず、むしろそのステレオイメージから敬遠されがちな分野ではあったが、ここ数ヶ月の間で物理に関する入門書の売上が急増していることも明らかになっている。

10月に入ったが、いつしか電車や駅ではS・I・Nのポスターが多く見られるようになった。日本武道館でのライブが決定したらしく、その宣伝に躍起になっているようだ。白取は登校中、電車に揺られながらそのポスターを見つめていた。ポスターの中央部分にはメンバー3人の姿が印刷されており、その少し下のほうに大き

なマークがあった。白い線で描かれた円に正三角形が内接しており、その三角形の中に目のようなものが描かれている。白取は妙に薄気味悪いものを感じた。

そんな今日この頃であるが、先月にはまだ残っていた夏の暑さも和らぎ、白を追うことに少しずつ気温が低くなってくる。白取の学校でもちようど衣替えが始まり、生徒たちは白いYシャツから黒の冬服へとその装いを変える頃合いになった。久々に着た冬服の長袖に慣れない感じを抱きながらも白取はいつもの駅で下車した。

すると、同じ学校の生徒の3人組を見かけた。驚いたことに、みな右腕にリストバンドを付けている。これは、S・I・N・のメンバーが付けていたものと同じで、電車で見たポスターのそれと同じ薄気味悪いマークが描かれている。

教室に入ると、既に遊馬智がいた。彼も同じようにリストバンドを付けていた。

「智、お前もそれかよ…ほんとみんなS・I・Nが好きなんだな」「何言ってるんだよ！サイコーだぜ。ユウも一度は聴いてみるよ！」

そういえば三日後に新しいアルバム出るってよ！お前も買わないとみんなに乗り遅れるぜ」

「…CDって誰かに薦められて買うものなのか？」

「あーもう幸せだぜ…このリストバンド、土曜日に店で3時間並んでやっと買えたんだよ…」

「——聞いちゃいないか…」

遊馬はリストバンドを何度も撫で、それに見蕩れている様子だった。何も彼だけではない。登校してくる女子の多くがリストバンドを身につけ、お互いに見せ合っていた。どうやらリストバンドは黒だけではなく、白いものから赤や青などといった様々な色のバリエーションがあるらしい。

白取はしばらく教室の様子を見ていたが、見ていて少し気になったことがあった。いつも黒板の前で談話している女子4人組のことだが、最近は一人減って3人しかいない。――だが、今はそんなことはどうでもいい。

彼はふいに花瓶の置かれた席に近づく。そう、伊村有希はもういない。放課後に保健室に寄る必要もなくなった。そして花瓶の前で一言言う。

「おはよう、伊村さん」

昼休みになったが、昼の放送中にもS・I・Nの楽曲が流れた。一部の女子生徒はそれに熱狂し、クラスが騒がしくなったので白取はいつもよりも早めに屋上へ向かった。とりあえずここならば放送が聞こえないのでゆったりすることができる。彼は鞆からコンビニで買ったヤキソパンを取り出した。ここに来てもやはり伊村のことを思い出す。彼女が飛び降りたのはこの屋上ではなく、向こう側の校舎の屋上だが、やはり屋上と聞くと連鎖的にあの光景を思い出してしまう。

「あいつ、なんであんなに綺麗に飛び降りたんだろうな……」

飛び降りる寸前、風に吹かれる彼女の姿がフラッシュバックする。その姿は、教室で見る彼女とは比べ物にならないほど美しく、まるで天使のようだった。

「ほんとに天使になりやがったんだな――」

白取は空を見上げて独りでつぶやいた。ふと周りを見渡すと、貯水

槽の横のほうに人影があつた。

普段ここには白取一人しかいないはずだが、もう一人の人間がいた。彼は半ば好奇心に駆られ、忍び足で貯水槽に近づいた。少し背徳感を感じつつも影から覗き見ると、その人影の正体が分かった。

——園浦英梨。驚くことに彼女は談話していた女子4人組のうちの一人だった。今月に入ってから急にこちらの教室に来なくなった。今までどうでもよかったが、今ここで彼女の姿を見て少し気になった。よく見ると彼女は本を読んでいた。文字に集中していてこちらには意識が向いていないようだ。

「どうも…」

「ひえっ!？」

突然白取に挨拶され飛び上がる園浦。手に持っていた本を地面に落とす。表紙には『Alice in Wonderland』。世界的に有名な外国の文学作品の一つだが、これはその日本語訳版のようだ。

「…不思議の国のアリス…変わった本読んでるんだな」

「アンタ…そういえば隣のクラスの…白なんとか」

「白取だ。てか、なんでこんな隅っこにいるの？」

「最近屋上は先生が見回りに来てるって聞いたから。アンタも気をつけないと見つかるわよ」

「別に屋上じゃなくても本は読めるんじゃないかな」

「…ここは眺めが良いから…気分転換よ」

「ああ、そうかい」

彼女と少し距離を開けて座る白取。おもむろにパンの袋を開けて昼食を取り始める。

「そついえばメシ食ったのか？」
「とつくに食べました」

園浦はそのショートヘアと豊かな感情表現が示すとおり、活発なほうの女子である。こういうタイプの女子はみな流行に乗り、S・I・N・のリストバンドをしているのだが、彼女はしていなかった。

「ねえ、S・I・N・って人気なのか？」

「大人気らしいわね、あたしにはちよつと分からないけど」

「園浦さんもそう思う？俺もなんか分からないんだよな」

「だいたい、好き嫌いなんで人次第なのに、何で周りに合わせないといけないのよ」

「——多分、そのほうが楽だからだよ」

白取は考えをめぐらせる。

ヒトは、社会生活においてグループを形成する傾向がある。特に、共通の話題や趣味があればあるほどその結束力は強くなる。このグループを作るという傾向は、何もヒトだけに見られるものではない。イワシやカツオなどといった魚類も、群れを作って行動する。こうすることによる利点はいくつかある。まず、群れを作ると自分よりも大きな個体に襲われる確率が低くなる。また、カツオは群れで獲物を取り囲み捕食するという狩りを行うことでも知られ、群れであるという条件を上手く利用している。食物連鎖の世界でも、グループ作りは自分の身を守るために極めて有効な手段なのだ。ヒトも元は猿だった。自然の生物のときの本能が強く残っているのだらう。

だが稀に、そのようなグループを作れずにあぶれてしまう人間がいる。恐らくそれが伊村有希だったのかもしれない。不登校の原因は人間関係によるもの、コミュニケーション能力の欠如から来る不安

感や恐怖感などによるものが多い。そういった個体は自然界では大型生物に捕食されるが、人間の社会ではストレスあるいは他の人間によって捕食される。グループに馴染めない人間は排斥されるだろう。また様々な悪い想像を抱き、自壊するだろう。それを避けるためにヒトはグループを形成するのかもしれない。

昼休みの帰り、白取は嫌なウワサを耳にした。

「園浦ってなんか嫌だよねー、S・I・Nのこと嫌いって言うたし」

「私もそう思う、そういうときは嘘でも好きって言うもんでしょ。」

わざわざ嫌いなんでダイレクトに言わなくてもさ」

「あんたたち何うじうじしてんのよ。あんな奴さっさと捨てちゃえばいいじゃん。あたしたちには合わないんだからさ」

リストバンドをした彼女らの会話は、聞いていて耳が痛くなった。グループという集団を作りながらもそこに求めるのは見せかけの安心感と同調であり、友情などといった綺麗なものは微塵もない。冷酷な陰口を続ける彼女らは、まるでグループの人間を駒としか考えていないようである。

それからというもの、生徒たちは男女共にS・I・Nの話ばかりするようになった。遊馬も例外ではない。他の運動部の仲間と、彼は親密な関わりを持つようになっていき、白取とはあまり話さなくなった。無論その関わりというのはS・I・Nがあつてこそのもだった。S・I・Nはクラスの多くの人間に結束力と団結力をもたらしたが、その一方でそれを好まない者たちは次第に存在を認められなくなってきた。白取もそうだった。かつてクラスメイトとは気軽に話をしていたが、このS・I・N・ブームによって、クラスメイトは自分と共通の嗜好を持つ決まった人間とグループを形

成するようになり、彼は次第にクラスの中で浮いた存在になっていた。

「…団結とか絆ってのは綺麗な響きだけど、なんだかこういう絆ってのは不気味だな…」

クラスにのさばる、気味の悪いマークを手首に携えた者たちを見て、彼は少しずつ異様な雰囲気を感じ始めていた。

ある日、白取が屋上に行くとき既に先客がいた。園浦である。地面に三角座りをしてずっと遠くを見ていた。

「今日は文化祭だったのに、浮かない顔してるじゃん」

彼女は足音で白取の存在に気づいたのか、遠くの方を向いたまま言った。

「……まさかとは思うけど、園浦さんも浮いてるの？」

「あたしの顔が浮いてるってこと？」

「いや違う……園浦さんもクラスで浮いてるのかな、ってこと」

白取は園浦のすぐ横に腰掛けた。

「変なこと訊くのね」

「不愉快だったらごめん、やっぱ……こういうことってあんまり言っちゃいけないよな…」

「——自分の意思を押し殺してまで他人に賛同するくらいなら、浮いたほうが良いわよ」

彼女のその言葉はもつともだった。

「ああ、そうだな。そう思うと浮いてることが心地よくなってくるような……こう、ウキウキするような」

「うふっ……やめてよ」

さりげなく混ぜられた白取の寒いギャグに不意を突かれたのか、吹き出しそうになって口元を抑える園浦。

「——まあ、とりあえず適当に回ってくるとするよ」

「いつてらっしゃい、あたしはここで休んでるね」

今年の文化祭は派手だった。皆が団結してクラス展や部活展に取り組み、広い中庭には焼き鳥やお好み焼きなどの出店が並んだ。人混みのなか、一人で歩いていると、妙な感覚に襲われた。

「……伊村が言ってた、『居場所が無い』ってこういう感覚なんだな……」

恐らくは彼女は今の白取よりも遥かに大きな苦しみを一人で抱え込んでいたのだろう。

「へい！へい！ユウ！」

そんな中、誰かの声が彼を呼んだ。振り向くとそこには遊馬の姿があった。彼は部活の展示で店番をしているらしかった。遊馬に引張られ、その展示がされているという教室に到着する。

——並べられた机の上に並ぶ的。そして置かれたたくさんの商品。どうやらここでは射的ができるようである。

「一人3発まで、当たらなくても何かもらえるぜ！折角だからやってけよ」

「おお、それはお得だな」

白取はおもちゃの射的用の鉄砲を手に持ち、構えた。

引き金を引くと吸盤つきの弾が飛び出し、ゆるやかな放物線を描いて机に当たった。

「…もうちょつと上だな」

もう一度引き金を引く。すると、的の隅に当たった。横で見っていた遊馬がもう一発の弾を渡す。結局、3発中2発が命中し、白取は景品を2つ貰えることになった。

「んじゃー、これ景品な。他の奴にも宣伝してきてくれよ！」

「はいよ」

景品を受け取りそこから立ち去る白取。賑わう校内のなかを一人で移動していると、こういうわけが心が平静さを失いそうになった。

そして、そのまま屋上へと戻った。園浦に「おかえり、早かったじゃん」という言葉を投げかけられ、彼は不思議な安堵感を感じた。

「折角だし、射的やってきた。景品2つも貰っちゃったんだけどさ……」

景品はキーホルダーだった。円形の透明なプラスチックの中に四葉のクローバーが閉じ込められている。

「俺、二つもいらないし、一個あげるよ」

「あ、そう。ありがとね」

「1万分の1の割合なんだってな、たくさんある三葉のクローバーの中で四葉が発生するのは」

「へー。携帯に付けておこうかなー、何か幸運が来そうだし」

笑みを浮かべる園浦。そのとき、中庭のほうから大きな音が聞こえてきた。聞き覚えのあるピアノの前奏。そしてギターの弾き方。間違いない、これは先日テレビのライブ中継で演奏されていたS・I・Nの新曲だ。中庭で、生徒のコピーバンドが演奏を始めたらしかった。異様な熱狂と歓声があちこちから聞こえ、文化祭の盛り上がりも頂点に達する。

「……S・I・Nって、自分たちが考えた曲を演奏しているわけじゃないのよ。他のアーティストが作詞・作曲した曲を演奏してるだけ。それなのにメンバーの3人ばかりに注目が集まる。確かに3人ともイケメンだとは思っけど、どうも好きになれないわ。どうしてこんなのが流行るのよ」

「——それは、メディアが取り上げてるからじゃないのか。たくさん報道すれば色んな人の目に付く。そうすれば口コミで広がるし、自然にブームが起きる。そういうことなのかもしれない」

白取は立ち上がり、安全フェンスの金網に手をかけた。

「なあ、園浦さん。最近おかしい出来事が多くない？」

「おかしい……って？」

「リンゴのCMで自殺者が急に増えたり、特定のバンドがいきなり異常なほど流行しだしたり。今までこんなことなかったし、意図的なものを感じる」

「何バカなこと言ってるの。そういう風に意識してるからそう感じるだけじゃないの？」

「…そうかな」

「だいたい、そんなことを意図的に起こせるわけがないし、起こせたとしても誰が得をするのよ」

「…悪い。ちよつと考え込みすぎてたみたいだ」

白取は彼女の言葉を受けて、それ以上このおかしい出来事に言及するのをやめた。急な環境の変化で少し牽強付会な考え方に陥っていたのかもしれないと思ったのだ。

そのとき、後ろのほうで扉が開く音がした。二人が振り向くと、そこには遊馬の姿があった。

「よお！白取…って…エエ!？」

白取の園浦の距離は近かった。白取は彼女のすぐ横に座っていて、第三者から見れば何らかの関係を持っている二人にしか見えないだろう。

「あの…お邪魔でしたか?…」

遊馬は白取の肩を叩き、屋上の隅に彼を連れて行った。

「おい、どつという関係だよ。ユウ、お前確か彼女いなかったよなあ?」

「いないよ。今も」

その会話は園浦の耳にも聞こえていたらしく、彼女が口を開いた。

「あの…あたしもう彼氏いるんですけど」

「えっ！その彼氏ってのはユウですか！？」

「…西高のバスケット部の人ですけど……」

「かーっ。ユウ、お前も苦労してんな。既にお相手がいるんだつてよ」

白取は表面上では何気なく振舞っていたが、実際は残念だった。だが、たとえ園浦に彼氏がいたとしても彼女との関係は何も変わらないだろう。良い方にも悪い方にも。

「遊馬…なんで俺が園浦さんのこと狙ってる前提になってるんだ」

「おいらもそろそろ作らないとなー、ユウに先越されたくないしー。じゃ、頑張れよっ」

景気良くガッツポーズして去っていく遊馬。相変わらず右腕には例のリストバンドをつけたままである。

文化祭は大盛況のうちに幕を閉じた。夕焼け色に染まった空と雲。校舎の中にはオレンジ色の光が満ち、昼とは違った様相を呈していた。白取と園浦は、文化祭の片付けにあくせくするクラスメイトたちを尻目に、教室前の廊下の窓で夕日を見ていた。

「なんかさー、こういう夕暮れ時って色々なことを考えちゃうんだ。だんだん暗くなってきて星が見えてきて、なんか世界が終わっちゃうような感じがしてすごく不思議な気分になる」

「白取くんってさー、ロマンチスト？」

「ん？」

「さっきからずっと黄昏れちゃってるじゃん」

「…そうか？」

ふと、提灯を手に持った生徒が後ろを通りかかった。恐らくクラスの展示で使われたものだろう。展示で使われたものは今日中に全て撤去されることになっており、明日には何も無かったかのように普通の教室に戻るのだ。

「…そういえば、神渡祭まであと一ヶ月ね」

園浦が夕日を眺めてつぶやく。

「神渡祭^{みわた}ねー、小さい頃はよく見に行ってたよ。しばらく見てないから、見に行こうかな」

「今年も派手にやるそうよ。花火も上げるって」

「なんかさ…俺たちも片付け手伝ったほうがいいよな」

「……あのリストバンド集団のなかに一人で入り込む自信があるの？」

「——ないね」

白取はこのとき、もうリンゴのCMのことやS・I・Nの流行に關しては自分の思い違いだ結論づけ、それ以上深く推理することは断念した。どちらにせよ、これが意図的に起こされた現象か、それとも自然に起きた現象かは証明する手立てがない。すべては白取自身の主観的な考えにすぎず、ゆえに悪魔の証明は不可能なのだ。

ちょうどそのとき、伊村有希が飛び降りた屋上のフェンスの上で、カラスが鳴いた。

HOSTILE（対峙）

小学校のグラウンド。白取はそこに立っていた。しばらく辺りを散策していると、大きな滑り台の裏にある目立たない木の陰で誰かのすすり泣きが聞こえた。

「ねえ、誰かいるの？」

そう話かけると、木陰から涙を拭いながら一人の男の子が出てきた。恐らく小学校低学年くらいだろう。男の子は顔を歪ませ、おもむろに近くにあった大きな木の棒を拾い上げ、白取に向けて構えた。

「待つてよ。俺、君の敵じゃないよ」

両手を上げ、武器を隠し持っていないことを明かす白取。男の子は渋々武器を下ろした。彼の服は土でよごれていた。

「どうしたの？ 転んだの？」

「ちがう……」

「きみの名前は？」

「……黒野操^{くろの みさお}」

白取が一步踏み出すと、黒野は後ずさりした。

「ど、どうせオマエもあいつらのグルなんだろ……！」

「そうじゃない。俺は……」

「やーっと見つけたっす」

そのとき、何者かの声が後ろのほうから聞こえた。別の男の子だ。恐らくこの黒野の同級生だろう。

「オイ、白取。みつけたらすぐに報告しろっていっただろう」
「待って、この子をどうするつもりだ」

別の何人かも集ってきた。彼らはみなグループなようで、逃げようとする黒野をひっ捕らえると、暴行を加えはじめた。

「うああ!!」

黒野が叫び声をあげ、近くにあった木の棒を拾い、グループの一人に思い切り殴りかかった。

「いてえ!!」

勢いよく振られた棒は頭部に当たる。相手の頬からは血が出ていた。黒野は何かに移られたかのように棒を振り回し、グループの間をひたすらに殴っていた。やがて棒を奪われ、グループのリーダーと思われる男の子がそれを構えた。

「このやろつ潰してやる!!」

彼は棒を大きく振りかぶる。白取は突発的に動き出し、彼を押さえつけ、棒を取り上げた。そして真つ二つに折り、遠くへ放り投げた。

「何でそんなことするんだ! 君たちの仲間じゃないのか!」

「……ちつ、シヤマなヤツ。黒野、覚悟してろよ。先生にいいつけてやる」

黒野は白取に礼を言い、立ち上がる。教室に戻ると、そこには黒野の担任の教師と思われる人物が一人で立っていた。

「黒野くん、ちょっと来なさい」

「はい……」

一人で教師の元へ歩き出す黒野。

「どうして太田君を棒で殴ったりしたの！危ないじゃない！あなたがそんなことされたらどんな気持ちになる？」

黒野の小さな肩をつかんで、彼の身体をゆさぶりながら強い態度で叱りつける教師。

「ごめんなさいでも、ぼく太田くんたちに殴られたんです。だから……」

「そういうときはすぐに先生に言いなさい。分かった？太田君にも言うておくから、もう暴力は振るわないこと」

「ごめんなさい」

そして、歳月が過ぎた。黒野は小学校の中学年になり成長していた。帰りのあいさつが終わりみんなが帰る頃。

「おい！黒野、オマエ散々みんなに嫌がらせしたんだから放課後の罰掃除やってけよ！クラス会でこの間決めたじゃねえか！」

「僕は嫌がらせなんてしてない！」

黒野は教室から逃げ出そうとする。だが、扉の直前で男子児童たちに取り押えられた。扉はすぐに閉ざされ、他の男子児童が箒を使っ

て扉を開けられないようにした。何度も扉を叩く黒野だが、内部から開けることはできなかった。クラスメイトに集団で取り囲まれ、彼はその場にうずくまった。

まもなく色々な罵詈雑言が彼に向かって浴びせられた。キモい・ウザい・卑怯者。白取は教室の隅でそれを聞いていて耳を塞ぎたくなつた。

「偽善者！…」

うずくまっただまの黒野がそう叫ぶ。

「偽善者はどっちだよ、あ？」

背の高い女子児童が彼の前に出てきた。どうやらこのクラスのリーダー的存在のようで、非常に知的そうな顔立ちをしていた。

「オマエが偽善者じゃないのかよ？」

「そうだそうだ！」

「偽善者！偽善者！」

手拍子と共に全員で偽善者コールが始まる。白取は止めなければいけないとは分かっていたが、ただ隅で見ていることしかできなかった。

白取が目を開けると、天井が見えた。ここは自分の部屋、そして

ベッドに仰向けに寝ているようだ。

「夢か……妙に現実感があつたな。でも、あれからもう7年か……」

黒野操——彼は白取の小学校時代の友人だった。無口で大人しく引つ込み事案だったため、頻繁にいじめの対象になり、白取はいつも彼のことを気の毒に思っていて幾度か励ましたことがある。だが彼は黒野を助けようとはしなかった。最初に滑り台の裏で黒野をいじめっ子から助けたとき、白取はクラスで孤立しそうになったのだ。嫌われ者の味方もまた嫌われ者になる。白取は孤立を避けるためにあえて黒野を助けることをしなかった。

「あの時……俺が助けていれば……」

高校生になった今でも、あのとき黒野を助けられなかった後悔が影を落としている。結局、黒野は自分の弱みを握られていたようで教師にいじめを告発することもできずに小学校を卒業した。中学はほとんどが小学校からの持ち上がりで、顔ぶれはそれほど変わらなかった。相変わらずそこでも黒野はいじめに遭っていた。中学生という最も多感で重要な時期に、彼は人間たるものが如何に恐ろしくそして信用できないものかを周囲から叩き込まれたのである。白取は孤立を恐れ、ただ黒野のいじめを傍観していた。黒野との関係がほぼ無くなっていたということもある。

ただ中学の頃の黒野は勉強だけできた。そのため、受験では県下トップクラスの進学校に見事合格した。彼は進学校で上手くやっていけているのか。気になったが連絡手段もなく会う機会も無いだろう。今は黒野が何をやっているかは推測することしかできなかった。

目覚めが悪いまま、白取は家を出て電車に乗った。彼は下のほう

を向いてずっと考え事に耽っていた。いつも考えていることよりもずっと深刻なことをずっと深く考えていた。下を向いたまま下車し改札を抜け、校門をくぐる。廊下を歩くときもずっと下を向いていた。すると、何かにぶつかった。

「…ちっ、なんだよ。前見て歩けっつの」

前からは同じ学年の男子生徒が数人横に広がって歩いてきていたように、白取は真ん中の一人と衝突したのだ。彼らはみなS・I・N・のリストバンドを着けていた。

「あ、悪い」

軽く謝り、彼らの間を抜けて教室に向かう。その後ろから「っざけんなよ、あの『ホステイル』野郎」という会話が聞こえた。どうやら『ホステイル』というのはS・I・N・のファンの間だけに通じるスラングらしかった。それからしばらくして、部活の朝練習が終わった遊馬が教室に入ってきたのでその意味を聞くと、S・I・N・の曲の歌詞の一節にある言葉で自分とは違う性質の人間のことを指すらしい。

様子を見る限り、リストバンドをつけたS・I・N・のファンたちはS・I・N・を良く思わない者や、自分たちの気に食わない人間を一緒に『ホステイル』と呼称し、敵対意識を持つ傾向にあった。いわゆるレッテル貼りの一つである。人はこういったレッテルを貼ることによって共通の敵を作り上げ、集団攻撃を行い易い状態を作り上げることがしばしばある。もはや選民意識を持っているとも思えるこのようなリストバンド軍団の不気味な団結力は、S・I・N・がただの流行のバンドではなく、カルト的で異様な人気を持つ神格化された存在に成り果てていることを端的に示していた。

朝のホームルームが終わり、一時限目が始まる前に白取は何となく隣のクラスの様子を見に行った。園浦が在籍するクラスである。彼女は隅の席だったためすぐに見つけることができた。遠くからそれとなく見ていると、彼女は一人で座って本を読んでいる。その本は屋上で白取が見た本と同じ、『Alice in Wonderland』。

「……そういえば、黒野も小学校のとき隅で本ばかり読んでたな」
ためらうことなく自然に教室に入る黒野。ふとした瞬間に窓際で話しているリストバンドの集団と目が合ったが無視した。

「よっ」
「そっちから来るなんて珍しいわね」

園浦は本を開いたままそう言った。

「……1年前はこんな風じゃなかったのに。なんかまるで違う世界に迷い込んだみたい」

彼女は静かに呟いた。白取は黙って聞いていた。

「ワンダーランドにでも迷い込んだのかな。俺たち」
「戻れるといいわね」

園浦が薄笑いを浮かべながら答える。

その日の昼休みも白取は園浦と屋上で話をしていた。だが白取はもうリングのCMとかS・I・Nのような不自然な出来事については言及しないようにしていた。心のどこかにつつかえてはいたが確信するには根拠が無さ過ぎるからだ。

屋上でも園浦は暇そうに『Alice in Wonderland』を読んでいた。しかし、彼女がふいにページをめくった瞬間地面に何かの紙切れが落ちた。

「なんだこれ……」

白取が拾い上げる前に園浦がそれを拾った。ページとページの間挟まっていたその紙切れには赤い文字でこう書かれていた。

——『YOU ARE HOSTILE!!』

嫌な予感が白取の脳裏を過ぎる。——黒野のことをまた思い出した。ちょうど小学校のとき、黒野へのいじめが始まった頃。そのいじめの最初の手段が悪口を書いた紙切れだった。男子たちは黒野の教科書にこのような紙切れを挟み、黒野の反応をして愉しんでいた。そこからやがて直接的に危害を加えるようになり、本格的ないじめが開始された。

「園浦さん、これって……」

「あたしのことを気に食わない人がいるってことね」

園浦はため息をついた。

「……みんなと違うことの何がいけないんだよ。リストバンドを着

けてないことの何がいけないんだよ」

白取は強い口調で言った。

「あたし、意地でもリストバンドは付けたくない」

「俺もだよ」

「だんだんあのリストバンドのマーク、見てて気分が悪くなってきたわ」

ちょうどその時日が翳り、空が雲に覆われはじめた。

次の日は朝から雨だった。白取は学校が早く終わったのをいいことに、久々に街の中心部ほうへ出向いてみることにした。傘をさして一人で小雨の振る道を歩く。ここから中心部までは徒歩10分程度なため、すぐに大きなビルが見えてきた。商店街を通り過ぎ、ゆるやかな下り坂を抜けると大きなスクランブル交差点が見えてくる。下校途中の学生をはじめとする色々な人が横断歩道の上を行き交っていた。

近くのビルに入り、エスカレーターを何回か登ると大きな書店が姿を現した。高い天井に落ち着いたインテリアが特徴的で、なかなか洒落たところだった。彼は幾度かここに来たことがあり、ここならば専門書から雑誌まで幅広いジャンルの本が手に入ることも知っていた。特に探す本などなく、適当におもしろそうだと思った本を手にとって流し読みしてみる。

そうやって書店の中を歩き回っていると学習参考書のコーナーがあった。有名大学の赤本やセンター試験対策などの本が目立つ場所に並べられている。奥のほうに誰かがいた。

「えっ……—」

白取はどきりとした。しばらくその場に固まってしまった。奥にいる誰かは後ろを向いたままでこちらには気づいていない。だが白取はしっかりと気づいていた。その誰かの後姿は明らかに覚えがあったからだ。誰かは本を読み終え、棚にしまう。そして白取のほうを振り向いた。雨が本降りになって、透明なガラス窓にたたきつける雨の雫が音を立てる。

「悠くんじゃないか、久し振りだね」

「……黒野——」

彼はまさしく黒野操だった。中学の頃から多少成長して顔も年相応に大人っぽくなっているし声も以前より低くなっていた。体格は昔とあまり変わらず痩せ型で身長はそれほど伸びておらず、白取のほうが背は高かった。彼は前髪を伸ばしており、髪の間隙からじつとのぞき見るように白取のほうを見ていた。

「お、おう……久し振り……どうだ？調子は」

「うん、調子はいいいよ。勉強している時だけはね」

「……その様子だと……上手くやってるみたいだな。進学校ってどんな感じ？」

「とてもたくさんのことを学べるところだよ。勉強もそうだけど、特に勉強以外でもたくさんね」

黒野はそれまで無表情だったが笑みを浮かべた。しかし、笑っているのは口だけでそれより上は先ほどと同じく無表情だった。

「にしても、黒野は随分大人っぽくなったな」

「そうかな。悠一君も、随分と背が高くなったね」

それから白取は黒野と一緒に本屋をゆつくりと回ることにした。旧友の再会は感動的なものだと思われがちだが、白取はどこか黒野に対して申し訳ないという感情を抱いており、素直には喜べなかった。

「悠一君、友達はたくさんできた？」

「たくさんってほどじゃないけど……少しはね」

「少し、ねえ……」

黒野はまた口だけを笑わせた。

「今幸せ？」

「なんだよいきなり」

「YESかNOかで答えて欲しいんだ」

「NO……」

黒野は今度は顔全体で笑った。

「僕は9月以降、幸せというものを感じるようになったんだ」
「……？」

「考え事が好きな悠一君なら知ってるはずだよ。あのリンゴのCM、最初に100人も死んだ時は本当に驚いた」

「……その100人の中には俺のクラスメイトもいた」

「その後、S・I・Nというバンドが大流行を始めたのは知って

いるよね。でも一見関係なさそうなリンゴのCMとS・I・Nの流行は、一つのキーワードによって結び付けられるんだ」

「キーワードって……」

雨が更に強くなる。

「——物理学だよ」

白取ははっとした。

「あのCMではリンゴが落下した。これがどういうことが分かるかい？」

「ニュートン……」

アイザック・ニュートン。16世紀から17世紀にかけて活躍したイングランドの偉大な研究者である。その研究分野は物理学・数学は勿論、自然哲学や神学など多岐に渡る。特に万有引力の法則で知られ、ニュートンはこの法則を発見するにあたってリンゴが木から落下するのを目撃しそこからインスピレーションを得たという逸話がある。

「S・I・Nについてはもう言うまでもないね？」

「S・I・N……サイン……sinθ……三角関数か」

「なかなか冴えてるじゃないか。もしかして悠一君も僕と同じことを考えていたのかな？」

ニュートン。三角関数。いずれも物理学に深く関係している。黒野はゆっくりと歩き出し、近くにあった椅子に腰掛けた。

「何となく関係はありそうな気がしてたけど、まさかこんな結びつ

きがあつたなんてな……。そういえば9月にアインシュタインのポスターも見たし、何つつても大人の間で物理学が流行していたり、物理学に関する事で色々おかしなことが起きてると思う。でも何で物理学なんだ？」

「……何でつて？ そんなことはどうだっていいんだ。それよりも学問が流行するなんて実に素晴らしいことだ」

そう言つて黒野は真上のほうに自分の手を伸ばした。まるで何かを掴もうとしているかのように。

「世界は変革を迎えているのかもしれない……——人類の進化を妨害する、獰猛で民度の低いスポーツや低俗な娯楽が排除されて、高尚な学問が人々に受け入れられはじめている。そこに僕は幸せを感じるんだ。ヒトは新たな進化を始めたのかもしれないよ。まあ、進化というのは誇張だけだね」

彼は立ち上がつて白取のすぐ横を通り過ぎた。慌てて引きとめようとする白取。

「この世の中には、何の向上心もなくただ流されるままに生きている人間が多すぎるんだ。そういう人間が自己主張している世界に幸せはない。そういう人間は無くさなきゃいけない。人間を向上させることができるのは自らの力によつて切り開く学問による叡智の追求だけだ。悠一君も、学問を蔑ろにするような低俗な連中と関わっているとは碌なことがないよ。そもそも人間は群れると墮落する。だから人と向き合うな、学問と向き合え。その先にこそ無上の幸せがあるんだ。その先に幸せな世界が待っているんだ」

黒野は白取に背を向けながらそう言い放った。

「…確かに人に流されるばかりじゃいけないし、勉強も大事だ。でも、それだけじゃ世界も自分も幸せにはならない」

「なるよ」

「俺はそう思わない。……世の中にはいろんな人がいる。学問に喜びを感じる人もいればスポーツや娯楽に喜びを感じる人もいる。それを仕事に生かす人だっている。世の中はそういう色々な人たちがいて上手く回っていると思う。みんながみんな学問を追及したら世の中回っていかないし、無くさなきゃいけない人間なんていない。目にも見えないし実感も沸かないけど、世の中はみんながバランスを取り合って成り立っているはずだ」

「——模範解答だけど、見当違いだね。悠一君」

黒野は振り向いた。彼の目は暗く燃えていた。構わずに話を続ける白取。

「それに、生きていくには人と向き合わなければならぬ。バランスを取るってことは助け合うってことでもある。人は誰かと関わってお互い助け合い、理解し合うことによって幸せになれる。一人じゃ決して幸せにはなれないはずだ」

一人では幸せになれない。それは伊村有希が白取に残した教訓なのかもしれない。彼女は常に一人だったのだ。

「よく言う」

黒野は白取を睨んだ。

「助け合うなんてよく言えたものだ。だったらなぜあの時悠一君は僕のことを遠くから見ているだけで何もしなかったんだい？僕を助けたらバランスとやらが崩れるからかい？」

先日の夢のことを思い出す白取。黒野が“偽善者”とクラスメイトに囃し立てられたとき、見ていることしかできなかった。助け出せなかった。嫌われ者に味方して自分も同じようになるのが怖かったのだ。

「……あの時は……」

言葉に詰まる白取。

「悠一君は僕のたった一人の味方だったはずなのにね」

うなだれる白取。黒野は彼を上から見下ろしていた。

「ヒトは僕を幾らでも裏切るけど、学問だけは決して僕を裏切らない」

黒野はそう言い残して去っていった。エスカレーターを下っていく彼の後ろ姿を見て、白取はかつての友人がどこか変わってしまったような気がした。

その日の食卓で、白取は父親に尋ねた。

「なあ、親父。勉強ってそんなに大事なことになるのかな？」

「どうした悠一、いきなりそんなこと聞いて」

「いや、何となく……」

父親はどこか遠くの方を見て言った。

「俺はお前を不良に育てた覚えはない」

「えっ……？」

白取は父親の態度の変容に愕然とした。

「勉強しない人間なんていうのは不良だ。そういう奴らがみんなの足を引っ張る。会社も同じだ。サボる連中がいるからどんどん悪い方向へ行く。母さんもそう思うだろう」

「ええ、その通りね。私、隣の川内さんに勧められて物理学のセミナーに行っただけですごく面白かったわ」

「……母さん、理科嫌いじゃなかったの？」

「それは昔の話。今は違うわ」

——何かが変わり始めている。父親は中学の頃遊んでばかりいたし、母親も理科が大の苦手だったはずなのだ。どこか言っていることの辻褄が合わない。テレビを見れば、音楽番組の代わりに物理学の番組が放送されていた。新聞の時刻表を見てもバラエティやエンターテイメント系の番組が全て廃止されており、あらゆる番組が学問に通じるものに差し替えられていた。

園浦英梨への嫌がらせは最初は本に悪口を書いた紙を挟む程度だったが、最近では靴や教科書が無くなったりするようになった。女子生徒の多くは園浦を無視し、また根も葉もない彼女の悪い噂が女子グループの間で広がっていた。白取は黙ってみていられず、ついに彼女のクラス担任の教師にそのことを伝えた。教師は一応は了承したようだが本格的な対策は成されず、嫌がらせが減ることはなかった。

「大人が気をつければ防げるはずなのに……みんな無関心なんだな」

愛の反対は憎しみではなく、無関心。そう白取は考える。――無関心は、憎む気持ちすら沸かないどうでもいい相手に対するもので、明確な敵対感情よりも更に性質が悪い感情だ。そういった感情を抱いている者たちは周囲の状況に非常に影響されやすく、正義にもなり悪にもなり得る。関係がないから共感を得たわけでもなく憎しみ合っているわけでもない。だから相手が何を考えているのかが分からないのだ。そういう時、人は勝手な解釈によって相手を判断し時に偏見を持ち、偏見は無関心な人々に容易に伝染しやがては害悪となる。

教師は恐らく生徒に関心が無いのだろう。また園浦と関係を持たざる者たちも、園浦を嫌う者たちの偏見に影響されて自らも偏見を抱くようになる。

「おーい、白取聞いてるか？お前不思議くんと一緒に準備室を頼むぞ」

「ああ、すまん……」

掃除中ずっとそんなことを考えていた白取は同じ掃除当番の男子に箒で頭をコンコン叩かれていた。今週は白取のグループは生物室担当だったが、他のクラスメイトと二人で準備室のほうの掃き掃除をするように促された。準備室の中は薄暗く、ホルマリン漬けにされた蛙や鳥の解剖標本が机に並べられ、お馴染みの人体模型も静かに立っていた。

「とつとと終わらせようぜ」

白取は箒を片手に床を掃き始める。もう一人はというと、ホルマリ
ン漬けになった蛙をじっと眺めていた。

「佐竹、何やってんだ？」

「生き物ってー、すごく芸術的だよー」

佐竹浩太——通称“不思議くん”である。背丈は白取と同じくらい
で、少し横に広い体型をしている。優しそうな顔立ちで人が良いが、
謎めいた行動が多いことで知られ、特に生物の分野に強い興味を抱
いているようだった。好奇心旺盛な小学生のように、いつも生物の
図鑑をズボンのポケットの中に入れていて、生き物を見つけたら
それがどういう名前でどういう生態を持っているのかということを
調べている。

「これはー…アマガエルの一種かなー」

蛙の腹は切り裂かれており、内臓の構造が把握できるようになって
いた。佐竹はまるで純粹無垢な子供のような目で色々な角度からそ
れを見ていた。白取は彼の手首を見るが、彼はリストバンドはつけ
ていなかった。どうやらまだS・I・Nのカルト的流行に吞まれ
てはいないようである。安心した白取は声をかけてみることにした。

「この辺じゃ蛙ってあんまり見ないよな」

「ねえー芸術的だと思わないー？生物の体の構造ってー」

「そうかな…」

「ねー、白取君たちいつも昼休みもないけどーどこに行ってるの
ー？」

佐竹は子供のような目で白取を見た。

「——あー、俺たち基本的に屋上で色々話してるんだ」
「あれー？屋上って立入禁止になってなかったー？」
「…見つからないようにコッソリ行ってるんだよ」
「それに“俺たち”って、一人じゃないのー？」
「ああ、仲間がいるんだ」

翌日、白取はいつものように園浦と屋上で話していた。

「最近、遊馬のことが気かりなんだよな」

「アンタあんまり話してないでしょ。時々そっちの教室の様子見に行くけど」

「あいつ、S・I・Nのファンのグループの奴と仲良くやるようになったんだ。でもあいつの好みだから仕方ない」

その場に仰向けで寝転んで空を見上げる園浦。

「——みんな、結局好みや興味でしか人を選んでいないのかもしれないな」

「なんか、白取って変わってるね。前から思ってたけど」

「そうか？」

寝転ぶ彼女のほうを見る。上を見上げていて無防備な首筋と女性らしい体つきを妙に意識してしまい、白取は見てはいけないうような気がして目を背けた。

「空ってこんな綺麗だったっけ」

何気なく園浦が呟く。ふと白取は彼女の制服の胸ポケットから四葉

のクローバーのキーホルダーがはみ出ているのを見つけた。

「何見てるの？」

「あ、いや、…キーホルダー、ちゃんと持ってたんだなって」

「これね。オシャレだしちょっと気に入ったわ」

携帯電話を取り出す彼女。クローバーのほかにもいくつかストラップが付いていたが、白取が何より気になったのは不意に見えたプリクラのシールだった。

「そのシールは？」

「彼氏と一緒に撮ったときのやつ」

シールの中で園浦は、髪を茶色に染めた長身の青年と一緒に手をつないで笑っていた。白取は急に彼女が遠い存在に感じた。

「これが西高のバスケット部の……」

「そう。身長180cmもあるんだって」

「身長が高いってそんなに良いのかな」

「カップルって、身長差15cmくらいが一番良く見えるんだって」

園浦と白取では、もちろん白取のほうが背は高かった。だが15cmも違うかといえればそれほどではない。

「お邪魔しますー」

その時、誰かが屋上に来た。振り向くと、そこには佐竹浩太の姿があった。彼は図鑑を片手に歩いてきて、座っている白取の真横に立つ。

「ここで何やってるのー？」

「駄弁ってるんだよ色々。ここは落ち着くのさ」

「ちよつと、この人誰？」

園浦は起き上がり、怪訝そうな目で白取に訊く。

「あー、こいつは佐竹君。俺のクラスメイトなんだけど、生き物が好きらしくてなかなか面白いんだ。良い奴だよ。屋上に来たいって言ってきたから来ても構わないって言っておいたんだ」

「…そう、別にいいけど」

「そうそう、佐竹君。来月——11月の第一土曜日暇か？」

白取は思いついたように言う。

「僕は暇だよー」

佐竹は図鑑を眺めながら答えた。

「みんなで神渡祭行こうぜ」

「いいね」

「…ごめんあたし彼氏誘っててさ——」

意気揚々と提案を投げかける白取だったが園浦の一言で一気に静まり返った。

「あー構わん構わん。佐竹と楽しむからなっ」

明るい顔でわざとらしく言う白取に、少し笑みを浮かべる園浦。

「何よ、急に元気になって」

「こうでもしないと気が滅入るだろ？ただでさえ不穏なことが多い時代なんだから」

「神渡祭ってもう5年くらい見てないな…屋台も出るんだよね？」

「うん、ここら辺じゃ一番大きな祭だからな」

晴れた秋空を下に、3人の若者たちは幸せそうに戯れていた。

だがまさにこの時、濁り水はゆっくりと流れはじめていたのである

ELIMINATE (肅清)

社会は明らかに変わり始めていた。人々はどういうわけか娯楽を一括りに悪と判断するようになり、学問を異常に重視する風潮が広がっていた。また学歴というものが就職においてそれほど重視されなくなっていた昨今だが、この風潮の影響からか再び学歴に重点を置くようになっていた。代わりに野球やサッカーなどのスポーツ、映画やゲーム、ギャンブルやパチンコなどは、娯楽として一般人に忌み嫌われる対象となり排斥される傾向にあった。また映画や小説、ドラマ、音楽などといった様々なエンターテイメントにおいても学問を主題に置いたものが増え始めていた。皮肉にも日本は黒野の言ったとおり知識・学問重視の知的な社会に変化していた。

S・I・N・ももはや日本を代表するトップアイドルの座へと駆け上がり、その支持層は若者だけでなく20代や30代の成人以上にまで広がっていた。メンバーが全員東大卒というブランドもあって、学問重視の風潮の広がりにも更なる拍車をかけていた。

不思議なことに、これらの不自然な出来事についてはメディアでは一切取り上げられていなかった。どのテレビ局もどの新聞も、当然のことのように何の違和感もなく淡々と報道していた。

11月に入り、秋も本格的な姿を見せ始める。気温も下がり、街路樹は色鮮やかにその色を変化させ、綺麗な鱗雲が空に浮かぶ。神渡祭は土日の二日間にかけて行われるが、初日である今日は朝から街の大通りに出店が並んでいた。祭のメインはやはり大きな山車で

あり、市街地を何週かした後に大きな川まで、大勢の手によって動かされていく。川の河川敷では二日目にたくさんの花火が打ち上げられる予定である。

その日の昼ごろ、黒野操はとある喫茶店に訪れた。黒のジャケットに黒のズボンで彼は全身黒尽くめだった。そして中に入り店内をしばらく見渡すと、何かを見つけたように歩き出した。

「存外、早かったんですね」

「ああ、君か」

彼が座った席には、背広姿の一人の男が座っていた。男は二十歳後半くらいだが、見た目は若く長身で、手の甲に血管が浮き出るほどの痩せ型だった。男と黒野は向かい合うように座り、お互いを見合った。

「——いきなり『こつちの世界で会いたい』なんて言つてすまなかつたね。でも君には会つてみたいほどの何かがあつたんだ」

男は黒野の目をずっと見ながら話した。彼は優しそうな目つきをしていたが、その口調は極めて平坦で異様なほど冷静だった。

「そうですか、手短にご用件だけお願いできませんでしょうか。長話すると頭が痛くなるんで——あ、そうだ」

黒野はそう言いながら青リンゴを机の上に置いた。

「これが約束の品です。これで僕が本当に僕だと分かるでしょう」「了承した。どうやら君は、本当に私がネットで話していた人のようだね。にしても、こんなにお若いとは思わなかつたよ」

「……ネットでは極力素性を見せないようにしているんですよ。どこから足が着くか分からないものでしてね」

「さてと」

背広の男は立ち上がった。

「注文してくるよ。君はどうだい」

「僕もしてきます。多少喉も渴きましたし」

カウンターで注文の後、机の上に飲み物を置き、二人はまた向かい合って座った。

「……今、日本で起きている怪奇現象についてはネットのほうの君が十分に語ってくれたが、改めて直接君の意見を聞きたいのだが、よろしいか？」

「はい。リンゴのCMによる自殺はまだ考察中ですが、S・I・Nの流行は明らかに作為的なものですね。メディアを見ているとそれがよく分かります。でも分かっているのは僕だけのようでして……それが少し残念です」

「なるほど、じゃあ何故君だけが、作為的だと分かる？」

「僕は基本的に一人だからでしょうね。……独立しているということは他者からの同調の影響をほとんど受けずに済むんです。皮肉ですが、そうすることによって世の中全体を客観的に見渡すことができるんですよ。そもそもあの流行自体が人間の同調本能に作用するように設定されているわけですから、独立した人間ほど流行の不自然さに気づきやすいのは当然といえば当然のことです」

黒野は自分のコーヒーを一口飲んだ。

「……同調本能か……よくそこまで調べたものだ。私の推理と非

常によく似ている。心理学には詳しいのかね？」

「人の心は苦手です。どんなに難しい数式を使っても解けませんし、法則性が無く、予測不能な振舞いを見せますから。カオス理論よりもタチが悪いです」

「ははは、私も高校生のときは、君と同じようなことを考えたさ。数式はすぐ解けるのに、どうしても人の心だけが理解できなくてね。あれほどめまぐるしく変化して様々な局面を持つのは人の心くらいだろう」

背広の男は笑ったが、それは声だけで無表情だった。

「僕が思うに、人の心というのは何層にも渡って殻がある球体のようなものではないかと。初対面や知らない人間に見せるのが外側の層で、親友や恋人などよく知り合った人間には内側の層を見せる。そして一番奥には決して他人には見せない自分の本性が隠れているでしょう。もっとも、僕には層を見せ合ったりした経験もないので全て憶測ですが」

外に植えられた広葉樹から鮮やかに色づいた葉が風に流されて何枚も地面に落ちるのが、店内の窓から見える。

「なるほど。大体君の考えていることが分かったよ。私が考えていることとほとんど同じだ。じゃあ少し話を変えて、質問だ。なぜ世の中は良くならないと思う？そして、良くするにはどうすればいいと思う？」

「世の中が良くならないのは、低俗な人間が多いからでしょう。現在はそういう人間があまりに多すぎて、まともな人間があまりに少ない。S・I・Nの流行が同調本能のせいであるように、人間の墮落もまた同調本能のせいです。逆を言えば、低俗な人間を排斥してしまえば自然とまともな人間が増えていって、良い世の中にな

るでしょうね」

「随分と厭世的な見方で物を言うものだね、君も」

「ええ、昔からの癖なのでね……」

強い風が吹き、カラフルな落ち葉が店の外でダンスを踊る。

「君の答えを聞かせてもらったが、なかなかだったよ。次は私の答えを聞いて欲しい。世の中が良くないのは、あらゆる人間が多様な考え方を持ってしまったからだと考える。したがって、全ての人間に同じ考え方を持たせれば世の中は良くなるだろう」

「つまるところ、価値観の差異ですか」

「そういうことだ。その価値観の差異から小さな歪が生じ、それが大きな亀裂となつて全体に波及し、人々の感情を乱す。この価値観の差異に関する問題を解消するためには、もっと深い領域まで踏み込んで、人の意識・感情がどういった原理で発現するのかを知る必要があるのだ」

背広の男ははじめて視線を黒野から外の景色に移した。彼は相変わらず機械のように無表情だった。そして彼は続ける。

「——我々はあのようなカラフルな紅葉を見て美しいと思うが、その美しいと思う原因はどこにあるのか、私は考えたことがある。このような意識の感覚はクオリアと呼ばれる、なぜ人が外部の情報から、このような主観的に体験される様々な質——意識を持つことができるのかは、これほど科学が発展した現在でも未だによく分かっていない。そもそも科学的に論じること自体ナンセンスなのかもしれない」

「意識のハードプロブレムと呼ばれていますよね。本当に難しい問題です。以前百科事典で見たことがあります」

「紅葉は誰が見ても美しいと感じるだろう。だから誰も紅葉を刈

ろうとはしない。つまり、価値観が一致しているのだ。極論、ウオリアの発生を制御して、誰もが同じ感覚を感じることができるようになれば世の中に争いなど起きようがない。だから、全ての人間に同じ考え方を持たせれば世の中は良くなるのだ」

黒野は目を輝かせて笑った。

「——素晴らしいです。あなたのような方に早くお会いしてれば僕は……」

「私が君をここに呼んだのは他でもない。君に協力してもらいたいからだ。知りたくないか？今起きている不自然な出来事の真相を。一体今、日本で何が起きているのか」

一方、白取悠一はというと佐竹浩太と共にスクランブル交差点のある大通りを歩いていった。神渡祭の当日ということでこの通りは200mにも渡って歩行者天国として開放されていた。

「人が多いな。佐竹、迷子になるなよ」

「言われなくても分かってるよー」

食べ物の匂いがただよってくる中、早くも佐竹のお腹が鳴り出した。

「腹減ったか？店で何か買ってもいいけどさ」

「ガッルス・ガッルス・ドメスティクス」

気の抜けた声で何か呪文のようなものをつぶやき、焼き鳥屋の看板を指差す佐竹。

「…何言ってるんだ？」

「にわたりの正式な名前だよ」

「図鑑で見たのか？」

「うん」

佐竹と共にしぶしぶ焼き鳥屋に並ぶ白取。そして彼らの番がきた。

「すみません、焼き鳥二つください」

「かしこまりました。400円になります」

店員に向けて注文した白取が佐竹のほうを見る。彼はポケットの中をせわしく手で探っていた。頭を掻いたり、一目見て何かに困っていることが伺えた。

「割り勘でいいよな、佐竹。200円」

「……財布忘れた」

ため息をつきながらしぶしぶ自分の財布から400円を取り出す白取。つまるところは奢りである。

「ごめん白取くん」

「気にすんな、今度からは奢らないからな」

「『いただきます』はー、鶏と白取くんに感謝して言うことにするよ」

「おいおい、俺まで食べる気かよ」

「白取くんはおいしくなさそうだから食べないよー」

「おい……ま、いいか」

近くの椅子に座り、焼き鳥を食す二人。佐竹は食べながら周りをきよろきよろ見回していた。

「どうかしたのか？」

「どうして、人間はみんな人間なのに争うのかなー」

「それは、価値観が違うからだと思う」

白取は焼き鳥を食べ終え、串を紙の皿の上に置いた。

「佐竹は生物が好きだろ？ だけど俺は好きじゃない。それが価値観の違いなんだ。100人いれば100通りの価値観があつてみんな違うんだ」

「そうだねー……でもなんでそれで争うの？」

「たとえば、佐竹と俺はかなり違うタイプだろ？ 価値観も性格も違うけど、どうして仲が良いんだ？」

「同じ人間だからじゃないのー？」

「……えつとだな。俺たちがこうやって仲良くやっているのは、お互いのことを認めているからだと思うんだ。俺は佐竹のことを認めてるし、佐竹も俺のことを認めてる。だから敵対しないんだよ」

佐竹も焼き鳥を食べ終わる。

「——人間は動物のなかでもとても不思議だねー。仲良くなったり争ったり、大切な仲間を傷つけたり、自分が分からなくなったり、悩んだり、自分で自分を殺してしまったりする。こんな生き物他にいないよ」

「そうだな。でも同じ人間なんだ。みんな理解し合えるはずなのに、相手を認めないから分かり合うことができないのかもしれない……認めない……ん？」

白取はそこで突っかった。遊馬のことを考えたのだ。彼と遊馬ではS・I・Nの存在が価値観を分断している。人間同士が理解し合えるならば、S・I・Nのファンである遊馬とも、他のクラスメイトとも分かり合えるはずである。白取は自分自身の矛盾に気づいたような気がした。もしかしたら自分自身が、S・I・Nが好きな彼らのことを認めていないのではないかと思った。

「……本当は難しいんだよな。認め合っつていうのは」
「そうだね！……」

それから夕方になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4434x/>

CONTROLS

2011年11月17日17時19分発行